

武蔵野日曜集会

第一の徴

―ヨハネ伝第2章1～11節―

1967年7月16日（武蔵野）

小池辰雄

カナの婚宴 もつひとつ奥の世界 相対的現実を絶対的現実として 彼の時 水が葡萄酒に変えられる 葡萄酒が尽きたれば 無一物無尽蔵 天来の無尽の葡萄酒 神の国を体現する毎日 空っぽの瓶 私たちが尽きざる葡萄酒に変えられる 「逆徴の福音」 キリストという第一の徴 キリストの徴となる

【ヨハネ2:1～11】

1 三日めにガリラヤのカナに婚礼ありて、イエスの母そこに居り、² イエスも弟子たちと共に婚礼に招かれ給う。³ 葡萄酒つきたれば、母、イエスに言う『かれらに葡萄酒なし』⁴ イエス言い給う『おんなよ、我と汝となにの關係あらんや、我が時は未だ来らず』⁵ 母、僕どもに『何にても其の命ずる如くせよ』⁶ と言いおく。彼処にユダヤ人の潔の例にしたがいて四五斗入りの石甕^{いしがめ}六個ならべあり。⁷ イエス僕に『水を甕に満たせ』⁸ と言い給えば、口まで満たす。⁹ また言い給う『いま汲み取りて饗宴長に持ちゆけ』¹⁰ すなわち持ちゆけり。¹¹ 饗宴長、葡萄酒になりたる水を嘗めて、その何処より来りしかを知らざれば（水を汲みし僕どもは知れり）¹² 新郎を呼びて言う、¹³ 『おおよそ人は先ずよき葡萄酒を出し、酔のまわる頃おい劣れるものを出すに、汝はよき葡萄酒を今まで留め置きたり』¹⁴ イエス此の第一の徴をガリラヤのカナにて行い、その栄光を顕し給いたれば、弟子たち彼を信じたり。

●カナの婚宴

カナの婚宴のところでは、

1 三日めにガリラヤのカナに婚礼ありて、

「三日め」と言いますのは、1章29節の「明くる日」から数えてちょうど一週間目になるわけです。婚礼というものは、キリストは好きなんです。いろいろ婚礼のことは譬話^{たとえ}で出てきます。喜んで出て行かれる。

イエスの母そこに居り、² イエスも弟子たちと共に婚礼に招かれ給う。

イエスの弟子たちも婚礼に招かれるというのですから、だいぶ親しい間柄であるらしい。



3 葡萄酒つきたれば、

葡萄酒が始めから披露宴に出たわけです。葡萄酒というのは、葡萄の汁というのは旧約から非常に飲まれたわけです。イザヤ書5章に葡萄園のことが出ています。

「われわが愛する者のために歌をつくり、我があいするものの葡萄園のうたをうたわん。わが愛するものは土肥えたる山にひとつの葡萄園をもてり。²彼の園をすきかえし石をのぞきて嘉ぶどうをうえ、そのなかに望楼をたて酒槽をほりて嘉葡萄酒のむすぶを望みまてり。然るに結びたるものは野葡萄酒なりき。」(イザヤ5:1～2)

葡萄酒をイスラエルに譬えて言ったところの話です。それから、イザヤ書63章には、「このエドムよりきたり緋衣をきてボツラよりきたる者は誰ぞ。その服飾ははなやかに大なる能力をもて厳しく歩みきたる者はたれぞ。これは義をもてかたり大にすくいをほどこす我なり。²なんじの服飾はなにゆえに赤くなんじの衣はなにゆえに酒槽をふむ者とひとしきや。³我はひとりにて酒槽をふめり。もろもろの民のなかに我とともにする者なし。われ怒によりて彼等をふみ忿恚によりてかれらを踏みにじりたればかれらの血わが衣にそそぎわが服飾をことごとく汚したり。⁴そは刑罰の日わが心の中にあり、救贖の歳すでにきたれり。」(イザヤ63:1～4)

酒槽を踏むと、葡萄の汁が服について真っ赤になるということがあるわけです。

その葡萄酒が尽きてしまった。

母、イエスに言う『かれらに葡萄酒なし』

と。お母さんがイエスに、彼らに葡萄酒がなくなつたから、どうしたらいいでしょうと。お母さんがやはりお手伝いに来て、台所の方にも行っていたと思えますけれども。

⁴ イエス言い給う『おんなよ、我と汝となにの關係あらんや、我が時は未だ来らず』

なんか謎めいたことを言ってます。

●もうひとつ奥の世界

イエスとっては、毎日の生活が――これは婚禮ですから特別な時でありますけれども――とにかく、いかなるときもイエスにとっては、その相対的現実が単なる相対的現実ではない。彼は相対的現実でありながら、いつも絶対的現実の中を歩いてる人なのであります。私たちも、そういう毎日の歩き方において――相対を逃避したってダメです、山に隠れたっていかん――どこまでも、皆さんと一緒に、周りの人と一緒に、あるがままの相対の現実にいる。また自分の勤めが何であろうと、勉強であろうと、工場であろうと、会社であろうと、どこであろうと。今具体的に取り扱う事態に対処しながら、しかし、在り方はそれを



もうひとつ奥の世界からその現実というものに入っていく。もう少しハッキリ言うと、その現実を直ちに奥の世界のものとしてしつかりと見ていけると言っても差し支えないわけです。単に二段構えではない。観念的に奥の世界というものを思っている、それはダメだ。相対的なものと即してその奥の世界においてあるということ。そうなつてくると、本当の生き方ができてくるわけです。

たとえば、私は時々、ドイツ語の授業の時間に学生に言う。これはただドイツ語の一時間にすぎない。やっていることは大した内容でもない。けれども、このドイツ語の時間にいつぶつたおれでも悔いがないというだけの気構えで立ち向かっているかと。私はいつ仆れてもよろしい。いや実に畳みの上で死にたくはない。自分がとにかくこの時に向っていることに全存在を投げかけた気持をもってそこで仆れるならば、自分はこれから大きな仕事をしようと思っただけでも、それで結構なんだと。何か大きな事をでかしたことが決してただ大きいというのではない。本当の大きさというものは、何でもないことにおいて、その大きな仕事に向っているのと同質のものをそこに投げかけているかと。そういうわけのものである、というようにことを時々言うわけです。

学生諸君がもし、教場というものを、

「いつもおもしろくない」

なんてなことを感じたり、あるいは新聞でそんなことを言っていたいたりするとすれば、それは我々教える者の責任である。そんなことを学生に感じさせるような教え方をしたのでは、それは本当にそれに対してしているのではない。学校で出欠席をやかましくとりません。本当は私は出欠席なんかとりたくはない。そんなことはひとつも本質的なことではない。出欠席なんかとらなくても、

「あの時間は行かざるをえない」

と言って生徒がやって来るような授業をしていなければ、本当でない。むしろ、理想的な学校の在り方というものは、出欠席なんかとらないで、我々教える者が本当に真剣勝負です。そのかわり、学生がいい加減であったら、大喝をくらわせることくらいやらなくてはいいかん。それくらいな気合でもって授業ができないならば、それは本当の学校ではない。自主的な学校ではない。学校というのは自主的な性格を持っていなくてはいいかん。なにも学校に限ったことではない。すべてがそうであるということです。

●相対的現実を絶対的現実として

キリストというのはいつも現実に、相対的現実を絶対的現実としてそれに立ち向かっている。だから、言うことが、すぐ言葉がちがう。

「女よ」

と。お母さんに向って、「女よ」とは何ごとかというわけだ。今の若い人なら言いかねない



かもしれないが。それはこの場合の「女よ」とはちがう。肉において「母」と言うことと、今キリストがここで神さまに示されていることはちがう。これは絶対に水を割れないものだから、こういう言葉が使われたわけです。この「女よ」という言葉は決して不謹慎な言葉ではない。「婦人よ」という言い方ですね、今の言葉でいうと。けれども、血肉の意味で「お母さん」と言っていて、この場合に親しんではいかん。そういうわけです。

たとえば、ヨハネ伝19章26節をみると、

「²⁶イエスその母とその愛する弟子との近く立てるを見て、母に言い給う『おんなよ、視よ、なんじの子なり』²⁷また弟子に言いたもう『視よ、なんじの母なり』この時より、その弟子かれを己が家に接したり。」(ヨハネ19・26～27)

とある。マリヤに向って「女よ」と言われた。ヨハネをさして、

「婦人よ、これはあなたの子です。私はもう向う側に行ってしまうから、これから地上であなた方が生活するのに、どうぞ、お母さんと子どもという気持ちでやってください」

と。ヨハネはイエスの母を母のようにして引きとったわけだな。言い換えれば、「ひとつ、マリヤを頼むぞ」ということです。しかし、それも「女」と言っておられる。

それから、コリント後書5章16節に、パウロが

「イエスを自分は肉をもって知るまじと思う。霊をもって知る」

と言っているのもそのことです。私たちが「キリストの懐に」とか、「イエスに親しむ」と言いましても、それはこの世的な気持の親しさとはちがう霊的次元における親しさです。

●彼の時

このギリシア語はおかしなギリシア語でね、

「何が私に、そして、汝に」

と、それだけです。英語の聖書を読むと、

「あなたと私とどこが共通であるか」

と。共通点は今はないんだと。それが「何の関係あらんや」という内容になるわけです。

「私の時はまだやってこない」

と言う。またこれは不思議な言葉です。この「時」という言い方は、ヨハネ伝7章30節、8章20節、13章1節、17章1節にある。

「²⁹我は彼を知る。我は彼より出で、彼は我を遣し給いしに因りてなり」³⁰爰に人々イエスを捕えんと謀りたれど、彼の時いまだ到らぬ故に手出する者なかりき。」(ヨハネ7・29～30)

「彼の時」というのは、彼が十字架にかかり、そして復活するという、神の直接的な示しの



時です。栄光の顕れる時。それを「彼の時」と言う。

「¹⁹ここに彼ら言う『なんじの父は何処にあるか』イエス答え給う『なんじらは我をも我が父をも知らず、我を知りしならば、我が父をも知りしならん』」

²⁰イエス宮の内にて教えし時これらの事を賽銭函さいせんげんの傍らにて語り給いしが、彼の時いまだ到らぬ故に、誰も捕うる者なかりき。」(ヨハネ8・19～20)

「彼の時いまだ到らぬ故に」

というのは、他の連中にはわからん。けれども、

「捕らえることができなかった」

とか、

「イエスはそこを通りすぎた」

とかいうのは、それはちゃんとキリストは自分が捕まる時、十字架にかけられる時、復活する時というのは示されていますから、その時が満ちるまでは捕まらないようにできている。キリストはちゃんと霊的な強き力をもってそれをはずして行かれる。御意を行うためには、妨げになることはみんな排除されて行かれるわけですから。

「¹イエスこれらの事を語りはて、目を挙げ天を仰ぎて言い給う『父よ、時来り、子が汝の栄光を顕さんために、汝の子の栄光を顕したまえ。』(ヨハネ17・1)

「いよいよ私の時が来ました。私が十字架にかかる時、あなたの栄光を顕す時が来ました」

というのがこの17章1節に出ている。「この時」とか「かの時」とか、「時」ということを聖書で研究したらなかなかおもしろい。昔の良寛の、「戦わんかな、時至る」なんていうのがあります、正にそういうわけです。

●水が葡萄酒に変えられる

⁵母、僕どもに『何にても其の命ずる如くせよ』と言いおく。

イエスが権威をもつてものを言われたものだから、お母さんもそれに気がついて、

「何でもいいから、その言うのに従っていきましよう」

と。マリヤは始め聞いたときは、そんな気持ではなくて聞いた。ところが、キリストのこの答えにぶつかって、ハッとマリヤは

「あつ、これはこれは」

と。自分の気持がずれていたことを感じたに相違ない。それでもう、キリストのこの権威ある言葉に触れましたから、参りまして、これからはもう自分がとやかくと、イエスに聞いたり何かしたりする筋合いのものでない。一切はキリストに任せようと。やはりマリヤはマリヤらしいところがあるわけです。



「何でも言うようにしなさい」と。

⁶彼処にユダヤ人の潔きよの例にしたがいて

食前食後に手を洗ったりどうのこうのとユダヤ人のやり方はやまかしい。それが律法ですから。

四五斗入りの石甕いしがら六個ならべあり。

一個が大体38リットルくらいだという話です。

⁷イエス僕に『水を甕かめに満せ』といい給えば、口まで満す。

口まで満水に満たした。

⁸また言い給う『いま汲み取りて饗宴長かむりまいがしらに持ちゆけ』すなわち持ちゆけり。

キリストが、「今」と言う。やはりこれも時を見計らって、「今」と言うわけです。もちろん、キリストは水を満たして祈られたにちがいないので、もう祈りでもって水が葡萄酒に変わっていることは、キリストはちゃんとわかっている。「さあ、持って行きなさい」と。

日本のお酒はお米からつくる。米の質のよい所のお酒はよいという。また、水質が問題だという。水の質がよくなければよい米はできない。水が常に酒の質を決定する。信仰の事態も正に品質のよい信仰が大事です。キリストに直結していた使徒たちの信仰。それ以外の、いろいろな理屈を加えたような、観念化されたところの、またある意味において御利益ごりやく化されたような信仰ではない。いろいろな靈験をつけられたような、ちよつとみると大変宗教的でよさそうでもあるが、実はそれは人間のつくった宗教的なものである。一番生まの、一番純粹な、一番深い、無色透明の信仰というようなのはこの「無」というのがそれなんです。

イエスが特に水を――このときの水も正に天からのもらい水というような水でしょう――そういう水を満々と満たして、これを天来の靈によつて葡萄酒に変えられる。とにかく、それが完全に葡萄酒に変わってしまった。祈りの世界では、ちよつどお魚がちよつとあつたら、それがすぐく多くの人を満たしたと同じように、摩訶不思議ではない。ちゃんと靈的な何か法則がそこに働きました、葡萄酒に変えられた。

すなわち持ちゆけり。饗宴長、葡萄酒になりたる水を嘗なめて、

靈的な葡萄酒になつてしまつて、

その何処より来りしかを知らざれば(水を汲みし僕どもは知れり)

「水を汲みし僕どもは知れり」という、ちよつと妙な言い方をしている。まあ、学者によつては、「どこかに隠れた種があつたのではないか」というようなことを想像する者もあるが、あるいはそうかも知れません。しかし、どうしたつて、それが葡萄酒になるわけのものではない。それが完全に葡萄酒になつた。

新はなむこ郎を呼びて言う、¹⁰『おおよそ人は先ずよき葡萄酒を出し、酔よのまわる頃



おい劣れるものを出すに、

始めは喜ばせるが、もう酔ってくると味がわからないから、いい加減なものでもとにかくお酒のような気分で作ってしまうから、というのが普通のやり方だが、

汝はよき葡萄酒を今まで留め置きたり』

それで非常に驚いたわけです。

イエス此の第一の徴をガリラヤのカナにて行い、その栄光を顕し給いたれば、弟子たち彼を信じたり。

それがキリストがなさった第一の徴であつた。そういう事実であつた。物語というか、宗教的な何かつくりごとでも何でもない。これは事実であつた。そういうことがここに書いてある。

●葡萄酒が尽きたれば

我々は、「葡萄酒が尽きる」というところをまず捕らえなくてはいかん。葡萄酒が尽きた、無くなったという。私たちはこの地上においていろいろなことをいたします。けれども、よく尽きてしまうわけです。「どうも行き詰まった」という。肉体的な力も、

「ああ今日は疲れてしまった」

と、疲れ果ててみたり。財布の中に金が無くなってみたり。毎日の生活で、「行き詰まり」というやつをよくやります。実は私たちはそういうものにぶつかって初めて「行き詰まった」なんて思っているけれども、本質的には我々が行き詰まりの存在なんです。何かものがあるような顔しているけれども、実は欠けている。「尽きる」ということは限界を持っている存在ということだ。我々は限界を持った存在である。何をやりましても、限界的であります。それをまあ、このことかのことかといういろいろ切り代えたりして、限界がないような顔しているけれども。

ドイツ語の「クンスト」という字は「技術、芸術」という意味です。「クンスト」はもともと「ケンネン」「できる」という字からくる。人間的な「できる」には限界がある。事実、技能というものはあるところまでしか行かない。その先は行き詰まって、どうしてもうまくいかない。

ある有名な話がある。ドイツ人哲学者のヘリゲルは日本文化の研究のために弓術を研究することにし、阿波研造に弟子入りしたが、行き詰ってしまった。それで、先生が

「明日の夜に私の自宅に來なさい」

と彼を招いた。真つ暗な自宅道場で一本の香取線香に火を灯しま的の前に立てる。闇の中に線香の灯がゆらめくのみで、的は見えない。それで先生は瞑目して矢を二本放つ。一本目は的の真ん中に命中。二本目は一本目の筈に当たり、一本目を引き裂いていた。

日本には、何か技術の道がある。ただの技術ではなくて、いつも私が申し上げる「大道



無門」のこの「道」である。道をおさめるところの在り方がある。これが日本的な行き方です。技術に尽きてしまつて、限界に来たら、その限界の先には行けない。始めから道的な行き方であれば、その限界の先に行けるんですけれども。道的ではなくて技である。まあ「神技」という言葉もありますけれども。神技となつたら、それは道の世界でなければ、それは神技とは言えない。

私は大学で文化部長をやっているが、文化部にしろ体育部にしろ、そのやることが同時に学問とあい反するようなことではないかん。学問をすることも部活動をする 것도、同じ精神がそこにももるような行き方で、お互いに本当に助け合つていかなければ、「人間形成」なんて言つたつて、それは空念仏に過ぎなくなつてしまう。

我々はある一つの本当の知恵、力の世界に入らなければ、進むことがどうにもならない。無尽というところに行かない。尽きざる世界。不_レ尽でも無_レ尽でもいいけれども、とにかく、滾々と湧き出てやまずという、尽きざる世界が、あの弓の先生のような具合に、「瞑目して」という世界がある。それが完全に絶対界に心が触れている世界です。絶対界に心が触れるということ。

青年諸君はみな力があるものだから、どうも「任せる」という気持ちになかなかならない。

「そんなのは意気地がないではないか。大いに全力を尽くしたらいいではないか」

なんて。ごもつともです。けれども、「全力を尽くす」という言葉が文字通り、全力が尽きてしまふんだ。全力を尽くしていいよ。尽きてしまふから。全力が尽きないところに来るためには――尽きてから気がついて悪くはないけれども――できれば尽きないうちに、尽きざる世界に入つて、有限なるものを無限なるものに切り替えて行きなさい。せつかく賜っている力を本当の力に替えるためには、

「有限なる力を自分で力と考えているうちはダメだよ」

ということなんです。

●無一物無尽蔵

あの「富める青年」の話がそうです。富んでいるけれども、実は尽きているような富み方なんです。限界を持った富み方です。無限界の富み方は、この無一物無尽蔵の姿でなければ、無限界の富み方ではない。これは才能であろうと、性質であろうと、みんなそうですよ。

パウロは優れた学才もあつた。けれども、そんな学才や知恵を塵芥ちりくずの如くとした。キリストを得たら、御霊における知恵は限りなきものであることを知つた。パウロはなかなか性格の強い男だつた。ああいう性格の強いのは嫌われたと私は思うね。頑固であつた。その性格の強さは、どうしても自分でわからない。大いにそれでいいと思つている。熱心だから。



「律法の義につきては責むべきところなし」

と。宗教的チャンピオンだから、「なぜ、俺のことを悪く言うか」なんて思うくらいだ。けれども、性格が強くて立派なんだけれども、これが大きな間違いだというので、キリストがとうとう——パウロは自分でわからないから——ダマスコ途上でこれをひっくり返してしまった。

「お前はいきり立っているが、なぜ、私を迫害するか。砕けろ」

と。「砕けろ」と言ったって、砕けないから、キリストはとうとう御霊の力でこれを砕いてしまった。それで初めてパウロは気がついて、

「わが眼より鱗の如きもの落ちたり」

と。彼は本当に平伏した。それだけの強い人は本当に平伏すまではダメです。また、学問のある人はその学を捨てる。とにかく、自分がこれだと思っているその長所はみな捨てられなければいかん。感情の豊かな人も、それが人間的な感情になつてはいかん。それも捨てます。まあ我々人間はみんなそれぞれ相対的なもので、それぞれの特色を持っている。けれども、それにうっかりすると、気がついていけませんから。それを捨てなくてはいかん。私はある人に、

「もつと砕けなくてはいかん」

と言つたら、もうこの集會に来なくなつた。それはかえつて他の人の妨げになるから。集會というものは本当にお互いに和がなかったら、集會というものは成り立たない。

「あいつがいるから、私は武蔵野幕屋に行くのをやめよう」

というのもかつていた。そうして出て行った方もあるわけです。そういう妨げになつていゝることを自分で気がつかないんだ、性格の強い人というのは。だから、よほどこれは気をつけなくては。

●天来の無尽の葡萄酒

とにかく、どういう長所にしても、これはと自分でむしろ長所と思つていゝるようなもの——もちろん、それを短所と思つても結構だが——長所はまた見方によれば短所になる。とにかく、私はいつも言うように、キリストの十字架というものは私たちに本当に砕けをもたらずのものである。およそ聖霊の世界では、この平伏しがないところには本ものは来ない。これはハッキリ言つておきます。魂が平伏しの魂にならないかぎり、どんなにそれが靈的に素晴らしいことであっても、逆にそれは靈的傲慢になる。サタンになる。靈的なものは力を持っているから、働きはしますよ。だから、キリストが言つたでしょ。マタイ伝7章に、

「私の名によつて病を癒し、悪鬼を追い出したとお前たちが言つても、私はたえて

お前たちを知らん」

と。即ち、神の名を、キリストの名を利用して、靈的な働きはいたします。けれども、平



伏しの魂でない。神の御意に従ってないことは、同じ現象があっても、質がまるつきり違うのだから。これが本当に今のキリスト教界でどれだけ分かつているか。一面では、一生懸命で観念、信仰の信条の戦いばかりやっている。それだからパリサイになる。人を審く。片一方では、御利益でもって霊的な力でやっている。それがへたすると、神・キリストが利用されている。十字架を抜きにしたところには絶対に福音の事態はない。他の宗教の事態はあっても。

しかし、その十字架は何かというと、「贖われた」ということの、ただ命題を信じていることではない。大事なのは、我々の魂が正直、十字架の砕けをいただいた平伏しの魂になっていることです。イエスが全くそうであります。とにかく、イエスを見てください。イエスはもの凄い力を持っていらっしやるのだが、決して私なさらない。それはみな神さまのものだと。サタンとの一騎討ちでもみな、神にあつての平伏しの勝利です。平伏しによつてはいる権威なんです。平伏しにおける力です。手放しのものではない。

私たちは、できるような顔しているが、実はいろんな意味において自分がいかに限界の存在であるか。しからば、徹底的に限界を知れ。

「何ものでもないということを知れ」

ということ。キリストがそうである。イエスは完全に人間の限界をハッキリと知っておられるから、

「何ぞ、我を善きと云うか」

と。私はこの言葉を何回繰り返して言うかしらん。自分を全く無善としている。即ち、キリストは初めから善に尽きている。力に尽きている。無力、無善、無私。みなこれに尽きている。そして、いきなり無尽の世界から、上から来ているところの無尽の事態を受けとっている。

「この水を飲む者は永遠に渴かない。泉の如くお前の腹から湧き出でるぞ」

というのが、この無尽の水である。

酒が尽きた。一生懸命にやった。結構なはなしだと。けれども、この世のどんな善いものも、どんなに備えられたものも、それ自体では本当の祝福にはこない。その婚姻を本当に祝福してやろう。それには天来の無尽の葡萄酒だと。水を変えて葡萄酒にしたところの――日本の酒は純粋な水から成る。水の水質がよいほどそのお酒の質はよくなるという。いわんや、イエス・キリストにおける霊的発酵体がその水にかかってきましたから――その水は普通の葡萄酒以上の葡萄酒がそこに出来上がった。これは霊的発酵体だよ。霊的効果だ。「葡萄酒が尽きたれば」という、この「尽きる」という一事に私はハタとこのことにおつかつたわけです。



●神の国を体現する毎日

こないだ、大学の先生が集会にやってきた。あの先生があとで私に、

「私は今まで方々の集會を訪ねて来たが、あの第6号『キリスト道』の小池さんの論文を読んで、これは普通のとは違うと思ったからお伺いした。その通りだった。

普通の先生の話の話を聞いていると、それは講義だけれども、先生のは本当の説教だ」

と言われた。私は説教はしないと言うけれども、本当の意味の「説教」というものは、私が言うところの「告白」になるわけです。私は説教をこれでいいなんて思っはけませんよ。まだまだダメですから。けれども、質的には、皆さんもお感じのごとく、私自身がかつてよりも違ったということを感じているごとく、いわゆるお説教ではないけれども、講義である。天来の音信をただお取り次ぎしているという説教である。皆さんも平伏しをもって聞き、私も平伏しをもって語るところに、本当に上からの事態が来るわけです。

「あ、そうですか。それはありがとうございます」

と。私はそういうことを聞けばただ平伏だけです。何でもありませんよというわけです。それほどの耳をもってあの先生はおられた。

また、ついでに言っておきますけれども、学生諸君が、

「小池先生の話の話を聴くと、何かしらんが、別なものの力を感じる」

ということの時々、学生が言う。やはり私は教場でただ教えるということをしていない。ドイツ語をやっているんだが、すべてはやはり福音の角度です。でなければ、私は授業なんてものは、自分でひとつもおもしろくない。いわゆる受け売りみたいなことをやっているのでは。

とにかく、毎日が楽しいわけです。マルチン・ルターが、

「楽しみと愛をもって(ミット・ルスト・ウント・リーベ)するところに本当の行為(タ

ート)がある」

と言いましたが、福音の世界は喜びの音信です。絵を書いている人でもそれに相違ない。塾で教えていて、本当に水を割らざるところの世界が展開していく。とにかく、どういう現実でありましても、私たちはその現実のフォルム(形態)を乗り越えて――フォルムをぶち破る必要はない――しかし、フォルムを、形態を本当に内側から満たし溢れて、変質変貌させていくということは、誰が何をいたしましても、福音を受けとった人はその在り方で行くわけです。歌を歌うのだから、みんなそこからこなければ、本当の歌にはならない。技術はもちろんある程度しっかりと修めることは必要です。けれども、技術の奥にいつも道がある。

それで、この婚姻の話も、よくぞ酒が尽きてくれたというわけだ。それでこの尽きざる酒がその次にやって来る。キリストは、もちろんここでもって顕した。それは、



「わが時はいまだ来らず」

と。「ちよつと待て」というわけだ。そして、すぐその次に「時」が来た。水を葡萄酒に変えたということはひとつの栄光の顕れで、やがて本当の「わが時」という十字架の時が来ます。とにかく、毎日がキリストにとつては終末的現実である。神の国をそこに現する現実である。私たちにとつても、神の国をそこに体現するところの毎日である。平伏しの無力の時に本当の力が出てくる。決して傲慢にならない。もうこれはどうも不思議です。そうでなかったら、必ずダメになるから。ハッキリそうです。魂の世界はごまかしがきかんですから。

●空っぽの瓶

「水を瓶かみに満たせ」

という。これはさつきからお話している通りでありますけれども、この天来の水は、ハッキリ言えば今度は聖霊のことになる。私たちにとつては、私たち自身が瓶である。今度は瓶の話だよ。この瓶の中に水を満々と満たす。霊水である。まあ普通の水でも、私たちはお腹がすいて何かご馳走をいただくよりも、喉が渴いて深山幽谷の真清水を飲む、この一杯の方が我々肉体的にも、清らかな澄んだ冷たい水を飲むときの、この快適さに及ぶものは私はないと思う。どんなご馳走だつて、アイスクリームだつて何だつてダメだ。水は最高です。喉が渴いているときには水はもう最高です。都会から山の中に入って空気を吸えば、あの空気がまた本当に天来の味を持っている。

自然的な生活においてもそういうような体験をするわけだが、いわんやこの宗教の世界で、

「十字架で罪が赦されました。おしまい」

ではどうにもなりませんよ。それでお終いではどうにもなりません。

「罪が赦された。ああすがすがしい」

と。いいですよ。すがすがしいんだけど、なおそこに水が来なくては。我々は瓶だから。それが空っぽになった。十字架がその中から余計な悪いものをみんな出してしまつたんだから。そうしたら、その空っぽの瓶の中に満たしてくるものがある。本当は渴いているんだ。この天来の水、聖霊がくれば、それが葡萄酒になろうと、ビールになろうと、何だつていいよ。

要するに、魂は聖霊のバプテスマを受けたら、もう他のものをもつて何も代えることができない。そこで私たちは――もはや主観でも何でもなし。人が何と言おうと、もうしようがないですよ――やむをえざるなりと、

「これを告白せざれば災いなるかな」

とパウロと一緒に言うわけですよ。



皆さん、夏の特別集会の時には、本当にそこで祈りをもって空っぽになってごらんよ。祈りをもって十字架を深く受けて、空っぽになって、そして満々とこの霊水を満たして、山から引き上げてくれなくては。何も特別集会に限ったことではないんだけれども。特にあらダメですよ。青年諸君は本当に体当たりしていく。私はあの相撲なんてものはよくわからないけれども。とにかく、あのようにももの凄く体当たりのぶつかって行く。ああいう相撲を見たいれば、そこにひとつのコツがわかるよ。向うの相撲のはなしではない。祈りの世界に入ったら、あの大鵬なんかやつつけることができると思う(笑)。大鵬ばかり強くてはしようがない。

●私たちが尽きざる葡萄酒に変えられる

イエスというひとは限界という事実を葡萄酒で見て、尽きたるところに尽きざる世界を顕した。わからなければ、まず尽きてください。青年諸君はいつペン壁にぶつかるといい。そしてこれを突破することを覚えたらいい。とにかく、いかなる時も私たちは自分に本当に尽きているという事態を自覚して、そして常に新たにこの尽きたる世界から尽きざる世界へと展開していくのが突破的前進だ。自己という殻の中に閉じこもっていることがもうこの尽きたる姿だから。その自己という殻の中から、常に自己否定、自己超克をして展開していく。

人生はいろいろままならぬことがありますよね。こと志に反したことやなにかいろいろ出てくるさ。いいよ。いかなる相対的な運命、現実にも出会うとも、いつもニコニコしている。微笑をたたえている。どうぞ、そういう突き抜けの魂になってください。

「あの野郎は、怒らせようと思って、ちっとも怒らない。いつもニコニコしている。気味の悪いやつだな」

なんて(笑)。まあそれくらいになるといい。私もちよつと短気な方だから、なりたいたいと思つてますけれども。

キリストが婚姻を、我々の人間的な祝福を越えた絶対的な角度の祝福をした。それで、この新郎新婦が、

「ああ、いい葡萄酒がきた。ありがたいな。おしまい」

ではダメだよ。その新郎新婦のことはちよつとも書いてないけれども。その新郎新婦がこの事態にぶつかつて、このキリストに――招いたのだから――どうして、そうなったのかと。

「私たちも本当に尽きざる葡萄酒に、天来の味を持った男女に、新家庭になりましょう」

と。そんなことは書いてないね。そうなたかならなかつたか知らないけれども。せつかくキリストは素晴らしい徴を与えているんだが、一向にそれが受けとられていない事態が



大いにあるわけだ。

第一の徴は即ちまた最後の徴でもある。

「我はアルファにしてオメガである」

と。結婚というものは、「羔の婚姻」といって、私たち、キリストを信ずる者たちが、全体が新婦として、天界に「神の民」として――神の民は新婦だよな――迎えられる雄大な希望を持っている。黙示録の最後に、壮大に壮麗に書いてある通りです。キリストが第一の徴としてなされたことがこの婚姻の席であったということは、非常にその意味においても、我々の人生、世界の歴史の終末に対する素晴らしい正に徴である。

現実はどうな尽きたような姿をしていても大丈夫ですよ。ええ。尽きない世界に入る。イザヤ書35章にあるような、いろいろな方々がみんな本当に祝福されて天界で迎えられます。そのことも約束されているわけであります。この曠野は即ち、沙漠はサフランの如くなる。

●「逆徴の福音」

大体、福音はまた逆説的にいえば、徴の宗教である。このことは私は、「逆徴の福音」として第26号に書いた。この『曠野の愛』誌26号(1956年秋冬季合併号)はもうほとんどなくなってしまった。そのうちに新書(曠愛新書)の中に入れなければならぬと思っている。この「言い逆らいの徴」をまだ読まない方もあるかもしれないね。1956年のクリスマスに話した内容です。この「言い逆らいの徴」という一文は私の書いたものの中で最も大事なものの一つです。

「一体、聖書の宗教は「徴」の宗教であります。創世記から黙示録まで、全巻「徴」の宗教です。パウロが、「ユダヤ人は徴を請い、ギリシヤ人は知恵を求む」(コリント前書1:22)と言った通りです。

徴を求めたって悪くはないんだよ。だが、求め方が間違っていたから、それで困るなというわけです。なにか、いわゆる徴を求めていると、観念信仰の人たちは徴そのものが何なのかと思ってしまう。それで大きな取り損ないをしている。困ったものだね。それはどうして正しい読み方ができないかという、やはり御霊が来ないと、この正しい読み方ができない。

宗教哲学的に思索し瞑想した神は私たちの魂を、存在を救う神ではないです。聖書の宗教は啓示宗教といわれます。即ち顕現、示現なのです。示現は即ち「徴」なのです。神様の方から自らを現して下さるのでないなら、私たちはいくら神様を暗中模索してもどうにもならない。ノアの大洪水のあとで神はノアに「契約の徴」として虹を現しました(創9・13～17)。主はまたアブラハムに現われました(創12・7)。「主の言葉が幻のうちにアブラハムに臨んだ」こともあります(創15・1)。モーセに対する主の顕現は著しいものでした(出エジプト記第3章)。エリヤに神は「火を降して」その祈りに



応えたまいりました(列王上18・38)。予言者アモスにも、或は蝗のしるし、火のしるし、準繩はかりなわのしるし等で語りたまいました(アモス7:1～9)。ホゼアに於ては彼の悲惨な結婚生活それ自体が大きなるしでした(ホゼア第1章)。イザヤはその召命にあたって著しいしるしにあずかりました(イザヤ第6章)。エレミヤも巴旦杏はたんきょう(「目ざめの樹」)のしるしや、沸騰する鍋のしるしを見ました(エレミヤ1・11～14)。エゼキエルに至ってはしるしだらけです、最も有名なのは「枯骨の復活」の異象です(エゼキエル第37章)。その他全く枚挙にいとまなしです。最後のヨハネ黙示録(本当は「顕示録」と訳すべきところ)は「徴」の最たるものでしょう。二云々ニ云々(「曠野の愛」第26号、1956年)

●キリストという第一の徴

そして、とうとうイエス・キリスト自身が最大の徴として現われた。今度は、キリストという徴ですよ。第一の徴であつて、徴そのものはイエス・キリストである。

「我を見し者は神を見しなり」

と言われたキリスト彼自身が徴そのものである。このキリストという徴にぶつからなかったら、私たちは「神さま」なんて言つたつて、瞑想したつて、思索したつて、唯一神論有神論なんて結論をいくら出したつて、どうにもならん。そんなことを言えば、フォイエルバツハからけなされる。人間が想い出した神さまを神としているのは信仰ではないと。そんな信仰は、フォイエルバツハに言われて、唯物論的に変わつていくわけです。そして、「いつたい、神が世界を創つたなんておかしなはなしだ」なんていうような連中がたくさんいるわけです。

イエス・キリストという、この聖人にも君子にも偉人にもあらざるところの、ひとつの神の人。

「イエスは何ぞ。神の徴である」

と、あなた方は答えなければダメだ。「神の子」なんて言わなくなつていい。「神の子」なんて言うつと、

「なんだ、それは神話でないか」

と。子だつて、弟だつて何だつていいよ。そんな乱暴なことを言つてはいかんけれどもね。とにかく、これは神の徴そのものである。福音書にぶつかつて、神の徴、キリストを受けとらないなら、さようならと言う話だ。「豚に真珠」で、そんな者とは議論はしませんよと。それだけのハッキリした態度があなた方はとれなかつたらダメです。この霊的な戦い、世界にどんな霊的なものが来ようとも、また思想的なものが来ようとも、びくともしないためには、ナザレのイエス・キリストという神の徴、そのものをハッキリと告白できなかつたならばダメです。

お釈迦さんも如来の徴ですよ。けれども、イエスは桁がちがう。その徴はまず馬槽うまぐちに現



われた。その徴がもう読めない。アウグストゥスなんていう、世界帝国の王者がローマにはいた。神殿玉城に住んでいるわけだ。片一方は馬槽に現われた。ところが、こちらの方が本当の「ザ・キング・オブ・ザ・キングズ」(王の中の王)である。全然、逆徴なんです。逆さまの徴です。とうとう、極悪人と同じように十字架にかかってしまった。これまた驚くべき徴である。贖罪の徴である。

「徴」というのは実力を持った徴ですよ。いわゆる象徴しごうではない。同じ「セイメイオン」という言葉を使っただけで、ちがうんだ。聖書の中に「徴と不思議」ということがよく書かれている。パウロの書簡にもたくさんある。しかし、この「徴」「セイメイオン」という字の方は、今言うところの「ジンボール」(象徴)とはちがう。具体的な神の真理の現われ、神の具体的な現われ、霊的具體性を持った現われ、これが「徴」です。

●キリストの徴となる

聖書から「徴」を引っ張ってやりだしたらきりがなければいけれども、ちょっと見るかな。マルコ伝16章17節に、

「17信する者には此等の徴、ともなわん。即ち我が名によりて悪鬼を逐いだし、新しき言を語り、

「新しき言」というのは「異言いげん」のことです。

18蛇を握るとも、毒を飲むとも、害を受けず、病める者に手をつけなば癒えん。」

(マルコ16・17～18)

というような驚くべきことが顕れるという。キリストを受けとる者にはそういった徴が伴う。ただ徴という現象ばかりを追求することはいかんけれども、キリストという徴を追求してくださいよ。そうすると、その人にふさわしい徴が顕れる。顕れた徴を、

「さあ私もそういう徴が欲しい」

と言って求めたって、それは宗教現象としては顕れるかもしれないけれども、福音的な把握の仕方ではない。

「そういう徴を求めるから、それはいかん。もうヨナの他に徴はないぞ」

とキリストは言われた。徴は実はキリストそれ自身です。そういうことは聖書に書いてないけれども、私はハッキリ言う。キリスト自身が徴である。シメオンが、

「この子どもは言い逆らいの徴で、その子どもに反するやつは倒れていく。そ

れに従う者は生きていく」

と。キリストは一番、生死の鍵を握っている徴ですから。

「この徴に躓いたら死ぬぞ。この徴に本当に自分を投げ入れたら生きるぞ」

という徴です。キリストという徴を求めてくださいよ。そうしたら、あなた方一人ひとり、その人にふさわしい徴が顕れてくる。その人自身がまずキリストの徴となるからです。



それが証し人ということ。証人とはキリストの徴となるということなんだ。そんなことは私は今日初めて言いましたが、本当にその通りです。即ち、

「わが証し人となれよ」

とは、

「わが徴となれよ」

ということ。それでは、その人はどういう徴であるか。芸術の上で徴となるかもしれない。また、お医者さんでの徴になる。何でもい。とにかく、その人がキリストを求めたいれば、その人自身がキリストの徴となつて、その人が賜っている才能が顕れいく。また、宗教的な意味で病人を癒すこともできるだろうし、人ひとりの徴の顕れ方はただ一つとは限らない。いろいろその人によつて神さまは適当に現していく。その徴そのものを追求してはいかん。徴を求めるなら、キリストという徴を求めよと。どこかにそういうことをパウロが言っていれば非常にいいんだけど、私はハッキリ言いますよ。

「キリストという徴を求めよ。そうすれば、お前たちユダヤ人も躓かないですむのに」

と。そこところは、キリストという徴にユダヤ人は躓いているのだから、しようがないよ。今でも相変わらずキリストを十字架にかけっぱなしでお終いなんだから。

自分自身が徴となつて、初めてそこに出てくる徴が「賜物」たまもの「カリスマータ」です。これはコリント前書12章、14章に書いてあるいろいろな賜物のことです。本当にキリストというものを求めて、徴を求めて、それと御霊において一つにならないものだから、無教会では、聖書がというような意味における徴という質のものが出てこない。もちろん、彼らは偽りではない。一生懸命ですから、その知的な面の顕れはある程度はあります。けれども、その知が本当の徴といわれるような知かといったら、どうでしょうかね。

内村先生が、ソーントンとかいう宣教師にぶつかつて――その人は本当にキリストの御霊の徴として説教していた――それに驚いたものだから、

「ああいう牧師さんなら幾人来てもいい」

と言つた。それはもうハッキリ、内村先生がひとつの御霊の事態にぶつかつて驚いたということが証明されているわけです。先生に御霊がないとは言いませんけれども。

要するに、一番大事なことは、今私に言つたとおりのことであり、そうしたら、我々は健全な意味における本当の徴を追求し、キリストという徴を追求し、我々自身がそれぞれの賜りたる使命、才能をこの霊的な角度から顕すことができることになつたら、それが、その人が本当の徴となることです。この第一の徴において、我々はキリストという根源の徴にぶつかる。そして、我々は今度は、第二、第三、第四と、あなた方が無限にその徴のナンバーを打つていくことになるわけだ。

